

皇帝の新しい最後の着物

I. それでは、欧米から見た東日本大震災ということで、まず 3.11 の翌日の朝刊における報道を、ざっと見ていくことにします。これは、すべて 3 月 12 日付けの、世界各国の主要紙の第一面で、22 種類の紙面をピックアップしたものです。ポイントは二つ。最も大きなサイズの見出し、ヘッドラインのつけかたと、写真映像のえらびかたです。ごらんいただくのは、フランスが二紙、ドイツが二紙、それからベルギー、イギリスの四紙、中国、香港、台湾の二紙、マレーシア、インドネシア、ブラジル、アメリカは五紙、そしてカナダ、の計 22 の新聞です。

◆スライドによる 22 種類の紙面の紹介

まず、ここで使われている写真映像はどうでしょうか。なかには、第一面に複数の写真を掲載している場合もあるので、写真の枚数は 22 紙の合計で 25 枚あります。その 25 枚のイメージのほうを分析してみます。

さて、これらのイメージのうち、視覚映像として見たとき、「水害」系と呼べるものがあります。特徴としては、津波映像がメインの対象で、画面には炎、火災、煙といった要素が不在です。

これに対して、「火災」系と呼べるイメージもあります。いま指摘したようなファクターが、かならず画面に現前しているタイプのもので、そのイメージは、カラー写真という意味では、炎の赤、延焼の黒煙ないしは白煙によって、色彩的に特徴づけられます。

トータル 25 枚のうち、水害系は 14 枚ありますので、比率は全体の 56%です。火災系は残り 11 枚ですので、こちらは 44%です。この観点からすると、映像という視覚表象における「東日本大震災」は、水害系の災害として、やや多くイメージされているといえるでしょう。

つぎに、ヘッドラインの付け方についてです。たとえば、名詞の「地震」や動詞の「揺れる」を意味する単語はどれくらいタイトルに含まれていたと思いますか。地殻現象の系列の語は全部で 8 回、登場していました。これを便宜上、「地殻系」と呼んでおきます。

いっぽうで、“t s u n a m i ”という単語を含んでいた例もかなりありましたね。何回ぐらいあったと思いますか。これは 6 回ありました。では、ずばり「ツナミ」とはいかないまでも、「波」を意味する単語はどれくらいでしょう。これは 5 回です。これらふたつを、「海洋系」と呼んでおきます。

もちろん、「ツナミ」と「地震」を両方使っている紙面もありますが、「地獄」や「黙示録」、「災厄」や

「猛威」といった抽象的な名詞を導入して、この出来事を名付けているケースも 6 個あります。これを「象徴」系と名付けておきます。

そうしたタイトルはほとんどつねに、この災害現象を名付けるものになっていますが、その例外として、インドネシアの『ジャカルタ・ポスト』ように「日本のための祈り」とか、カナダの『日刊モントリオール』のように「SOS 日本」という呼びかけ行為になっているタイトルは、この 2 紙だけで、全体の 1 割にも満たない割合ですが、心理的に印象に残ります。これを「祈願」系と呼びたいと思います。

ところで、「ツナミ」と「波」という用語は、同一紙面のタイトルに同時に使われることはありません。それゆえ、両者を合計した 11 回という数は、じつは地殻関連の語彙の使用回数 8 より、少しだけ多いんです。

以上、キーワードの使用数はトータルで 27 回です。それぞれの比率ですが、地殻系は全体の 30%、海洋系は津波が 22%、波が 18%で、あわせて 40%です。さらに象徴系が 22%、そして祈願系は 8%です。このヘッドラインという観点から見ても、東日本大震災は、言語表象としては、海洋系の事象としてより多くイメージされているのがわかります。

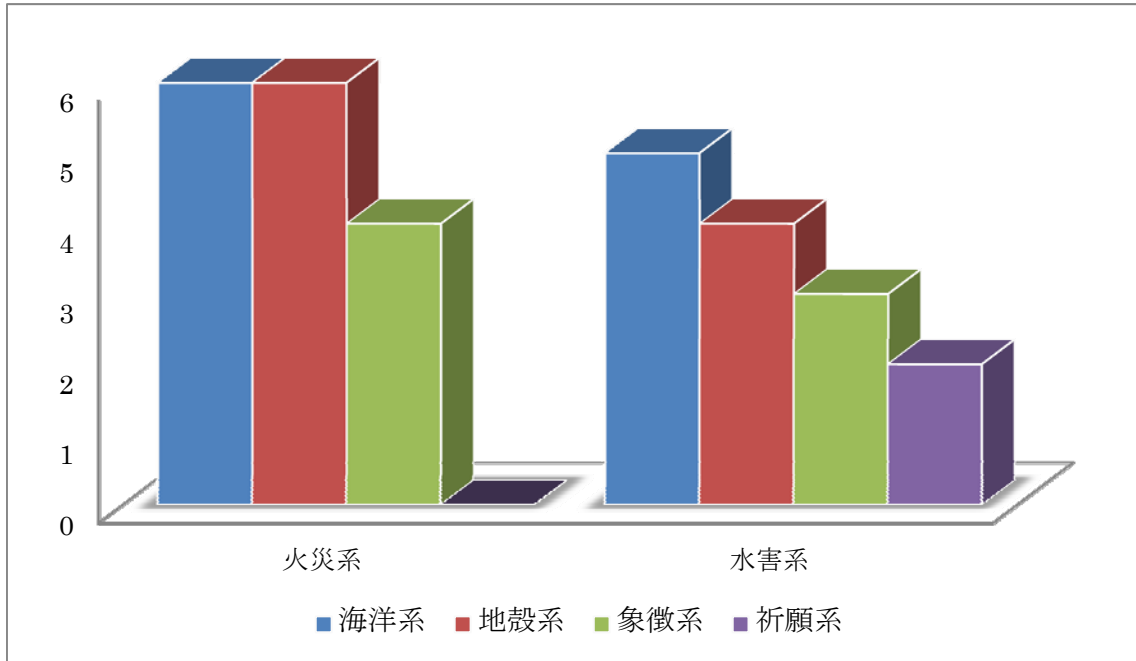
こうした頻度の高さの背景には、おそらく世界共通の認識として、近年とくに「ツナミ」という日本語が、災害現象として注目を集めているという歴史的事情があります。52 億冊の本の 5000 億語を集めた Ngram というデータベースがありますが、欧米語における「ツナミ」という日本語の使用頻度の推移を 1985 年以降見てもらうと、英語、ドイツ語、スペイン語、フランス語のいずれも、2000 年代前半になってから急激に増加していることがわかります。

3) しかし、ここでもう少し詳しく、写真という視覚的な映像言語と、見出しの記述言語との相関性を分析してみることにしましょう。さきほども言いましたように、同一の新聞の紙面に、複数の写真が掲載されていたり、複数のキーワードが見出しに入っているケースもありますが、それらの場合も全てカウントして算出したのが次の表です。

	地殻系	海洋系	象徴系	祈願系
水害系	4	5	3	2
火災系	6	6	4	0

数字だけではわかりにくいので、さらにこれをグラフ化して見ましょう。これはまず映像を、火災系と水害系に大別しておいて、それぞれの映像と結びつきやすい語彙の系統を可視化したものです。

◆1 映像別の2タイプからそれぞれ見た、語彙の親和度



◆1 映像のタイプ別で見た、語彙への相関性としては、

火災系の映像は—

- ①海洋系の語彙、及び地殻系の語彙と、同程度に親和度が高い。
- ②象徴系の語彙と、親和度が高い。
- ③祈願系の語彙とは、親和度が無い。

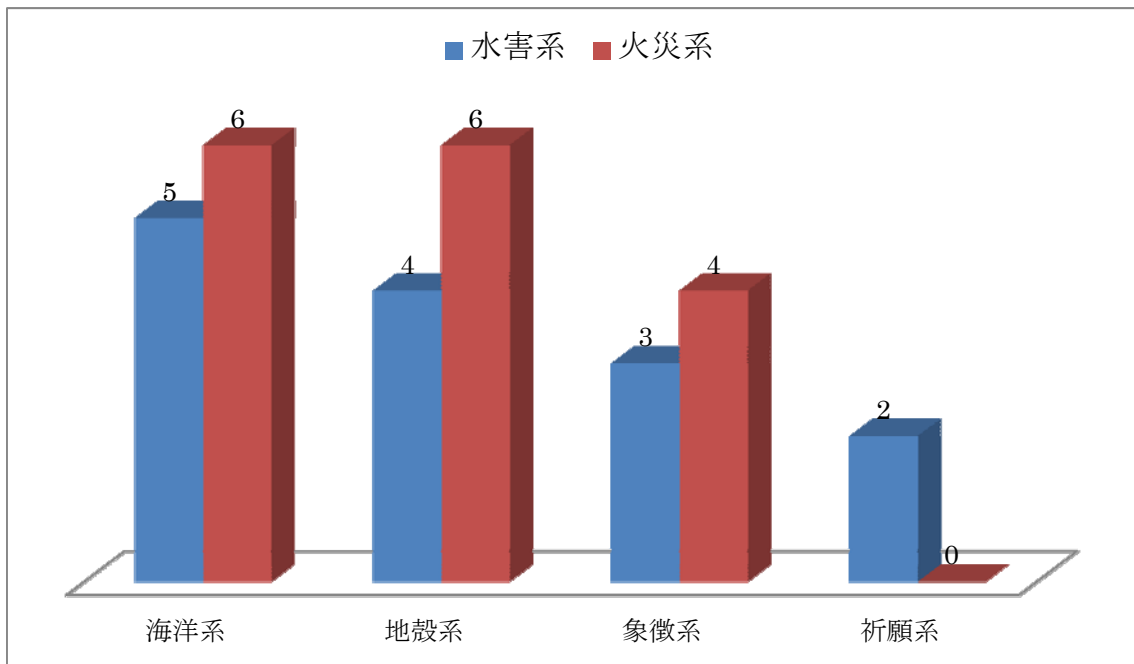
また、水害系の映像は—

- ①全種類の語彙と両立する。
- ②語彙間で親和度の順位が最も高いのは、海洋系である。
- ③祈願系の語彙とも、両立可能である。

以上の観察をまとめると、今回の震災報道では、火災・水害のどちらの映像を選ぶかという点で、記述言語の選択傾向に有意な差が生じていることがわかります。すなわち、火災の映像を選んでいる新聞は、ヘッドラインの意味内容が、海洋・地殻・象徴いずれかの系統に集中しやすいのに対し、水害の映像を選んでいる新聞では、ヘッドラインの意味内容の幅が、火災系よりも広く、かつ、海洋系の語彙をトップとして、選好に一定の傾斜があるということです。

つぎに、視点を切り替えて、まず記述言語を4種類の系統にを切り分けます。そして、その4種類の語彙がそれぞれ、どちらのタイプの映像と結びつきやすいかを見てみます。

◆2 語彙(海洋系・・・)が背景とする映像の2タイプ



◆2 各種の語彙から映像のタイプへの相関性

- ①海洋系の語彙は、火災系映像のほうが、水害系映像よりも、わずかに親和度が高い。
- ②地殻系の語彙は、火災系映像のほうが、水害系映像よりも、すこし親和度が高い。
- ③象徴系の語彙は、火災系映像のほうが、水害系映像よりも、わずかに親和度が高い。
- ④祈願系の語彙は、水害系映像のほうが、地殻系映像よりも、かなり親和度が高い。

以上の考察から何が言えるでしょうか。

どんな記述言語を使うかという点では、海洋・地殻・象徴系のあいだでは、映像の選択傾向に大差がなく、いずれも火災系が優位に立っています。これに対して、祈願系の言語だけが、水害系と強い結合を示しています。つまり、海・陸・災いなど、災害のどの側面に注目したヘッドラインを書いている場合でも、映像としては火災系を選択する傾向が維持されているのですが、祈願のメッセージ性をヘッドラインに出す場合だけは、逆に水害系だけが選ばれています。

さて、この段階までの手仕事的な考察を総合すると、つぎのような解釈が成り立つと思います。

わたしたちは、いちばん初めに、総数に占める割合という観点から、今回の震災は、映像表象としては水害系、また言語表象としては海洋系の語彙が、動員されやすいという傾向を確認しておきました。これに関しては、水害系の映像が、「津波」「波」などの海洋系の語彙と結びつきやすいことは、

常識の範囲で予想できます。同様に、火災系の映像が、「振動」「揺れる」など地殻系の語彙に結びつきやすいことも、常識的に予想できます。

しかるに、内在的な相関性を調べてみると、今回の一連の報道においては、火災系の映像に対して結びつきやすい語彙としては、地殻系と海洋系のあいだで有意な差が認められませんでした。さらに、語彙の側から見た場合も、地殻系・海洋系のいずれにたいしても、映像は火災系のほうが多く組み合わされていました。このような意味から、さらに細かい分析が必要となります。そこで注意しなければならないのは、じつは複数の新聞が、同一の写真映像を共有しているケースが圧倒的に多いという事実です。

映像の共有という意味で言うと、トータルで 25 枚ある写真は、じつは 7 枚の同じソースの写真から成っています。通信会社の系列によるものと思われるが、どの写真を共有しているかによって、22 の新聞は 8 つのグループに分けることができます。7 つの写真をそれぞれ共同利用している複数の新聞の 7 つのグループと、単独で独自の写真を採用しているグループです。

◆スライド「イメージを共有している七つのグループ」の紹介

まずは、この「津波のまえの民家」の写真を共通して第一面にもってきていた新聞ですが、これは 4 紙ありました。ここで注意していただきたいのは、同一の写真映像を使っている、4 つの新聞社がつけているテキストは、これもまた必ずしも一致していないという点です。ただ、さっきのヘッドライン分析で見た、いわゆる「祈願」系が 2 社ともこの写真を採用しているのは、有意的な特徴かもしれません。

以下、ざっと 7 種類の写真と、それに伴うタイトルをご確認ください。

最後に、自社の独自の写真映像を使っているケースが 2 つありましたので、これは第 8 のグループとして、別にくくっておきます。『ル・モンド』と台湾の『チャイナ・ポスト』、それと『日刊モンリオール』です。

ここでふたたび、さきほどのグラフに関する考察に立ち戻るなら、水害か火災かどちらの映像を選ぶかという点で、記述言語の語彙の選択傾向に有意な差が生じていることが思い出されます。すなわち、水害系の映像を選んだ新聞社には、これらの映像にたいし、海洋系の語彙によって、映像の意味を補強し、説明しようとする志向性があったと言えるでしょう。目で見た表象を言語が記述するという意味で、これをリアリズムの志向性と呼んでおきます。

集中的に選ばれた 3 枚を見ると、いずれも、津波の巨大なスケールが強調されています。また、そ

の波動、水の運動性、震災の破壊力の動態性が可視化されています。水害系の映像だけが、祈願系のメッセージを喚起していることは注目に値しますが、この祈願への志向性は、こうした映像的性格ともおそらく関連があると思われます。

対するに、火災系の映像を選んだ紙面には、論理的に前提されやすい地殻系の語彙とならんで、海洋系の語彙や象徴系の語彙も動員されていました。ということは、これら 4 枚の火災系の写真を選んだ新聞社は、読者にたいし、目で見せる火と、ことばで語る水、という撞着語法、オクシモロンを使っていることとなります。この修辞法は、ご存じのように、「燃える氷」「冷たい炎」のように、常識では両立しえない二つの要素を結合し、受け手に驚きの効果を与えようとするものです。

じっさい、これらの映像では、延焼する住家(じゅうか)の炎と、それをとりまく水が画面に同居しています。読者は、火と水を同時に見せられていることとなります。火災はきわめて明白な記号、被災を明示する記号ですが、そこに火と対立する元素としての水が存在することで、ヴィジュアルショックはさらに強度なものになります。

海洋系の語彙によるヘッドラインは、この映像内部の視覚的な対立関係を、さらに映像と言語のあいだで再度、反復していることになるでしょう。そのかぎりでは、海洋系のヘッドラインも、修辞学的な機能を持つと同時に、目で見ているものをそのまま言葉でも語るというリアリスティックな志向性をしている、と言わねばなりません。

これは、象徴系の語彙を使ったヘッドラインと比較して見れば、よくわかることでしょう。象徴系は、火災の原因・起源である地震や津波について語るのではなく、被害の強度、非日常性や、悲劇性、さらにいえば、本質的な否定性に着目して語彙を選んでいきます。

つまり、この出来事を、地震や津波といった自然科学的、地球物理学的現象としてとらえるよりは、地獄、黙示録、といった宗教的文脈における否定性まで喚起しているわけで、そこには逆に、この出来事を見ている欧米文化圏サイドに浸透している、宗教的な志向性が浮き上がっているといえるでしょう。この点では、日本語の新聞が、国内の災害にせよ、海外の災害にせよ、見出しに「この世の終わり」とか「末法」「終末」といった語彙を使うことはまずないのと対照的です。

II. 以上は3月12日の第一面ですから、ほとんどが地震・津波の報道に終始しています。これだけで被害が収束すれば、被災地の復興も、8か月たったいま、もうすこし進展していたかもしれません。しかし、阪神淡路大震災や、三陸沖津波と違って、今回の震災には、第三の巨大なファクターがあります。原子力発電所の放射能事故のことです。

11日の段階で、福島第一原発は、津波で全電源を喪失し、避難距離の指示が3キロから、10キロ、20キロへと広がりつつありました。12日午前10時17分に東電は、1号機のベントを行います。この影響で構内でも放射線量率の上昇が見られ、10:30に正門で385.5 μ Sv/hを観測。この時点では北北西の風によって、南南東の海上へと放射性物質は主に流れていました。

さらに15:36に1号機の建屋が爆発します。17:00前後に強い南風となったため、南相馬では、17:46には放射線量率が0.82 μ Sv/hに上昇しており(平常時は0.05 μ Sv/h程度?)、この時点ですでに放射性物質は到達していたと推測されます。その後、状況はさらに悪化し、15日朝6:10に今度は2号機で建屋が爆発。大量の放射性物質が拡散します。原発の正門付近では、8:31に8217 μ Sv/h、また9:00には11930 μ Sv/hと、正門の計測値としては過去最大を記録しています。

こうした原発の危機的状況については、欧米メディアはどう反応していたでしょうか。ここでは、特にわたしの専門分野であるフランスについて、『ル・モンド』(*Le Monde*)を中心にお話しします。『ル・モンド』は、フランスのオピニオン・リーダー的な存在です。前半の映像分析では、水害系の写真に、海洋系の語彙を使っており、リアリティックな志向性のメディアに分類されます。

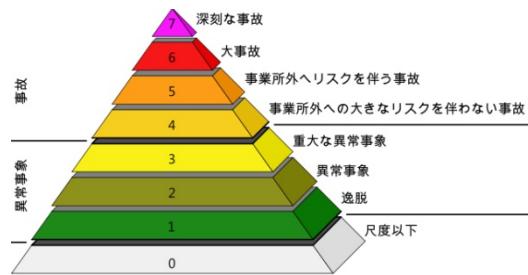
最初に紹介するのは、震災の翌日、3月12日の土曜の記事です。これはほんとに初期の段階の報道で、福島第一原発では1号機の水素爆発が起きたことを、フランス時間でその日のうちに報じています。おてもとの配布資料の1をご覧ください。

日本を脅かしている原発の大事故は、1979年3月28日に、炉心が部分熔融したアメリカのスリー・マイル島の事故に匹敵するものなのか？

この記事を書いているのは、往年の同紙の日本特派員フィリップ・ポンスと、ピエール・ル・イールの二人です。この時点で、彼らは福島と比較対象としてスリーマイルを事故の年月日付きで挙げていますが、記事のなかではチェルノブイリには一回も言及していません。

チェルノブイリの事故は、ご存じのように、スリーマイルの7年後、1986年4月に起こりましたから、記憶には新しいはずです。また、ヨーロッパには、放射能雲の危険をめぐる問題が、地理的に身近な問題としてのしかかっていたから、印象としては、この旧ソ連の事故のほうが強く記憶に残っているはずです。

スリーマイルのほうが比較対象に選ばれた理由は、おそらく、INES、国際原子力事象評価尺度によるスリーマイルの評価がレベル 5 だからでしょう。レベル 5 は、建物外部へのリスクを伴う事故でして、チェルノブイリのような最大級のレベル 7、最も深刻な事故のレベルまでには、まだツーステップあります。



おなじ 12 日の『ル・モンド』のほかの記事では、震災の死者が 1800 名を超えたことや、この、震災翌日の夜に、保安院が、INES、国際原子力事象評価尺度がレベル 4 であることを発表したことを書いています。またフィリップ・ポンスたちの記事の中盤にも、専門家のインタビューを引いて、「炉心溶融というのは極端なシナリオだろうと思われる」という見出しのついた段落があります。

「炉心溶融というのは極端なシナリオだろうと思われる」と考えるのは、オリヴィエ・ギュッパ、フランスの原子力安全庁(ASN)の副長官である。「わたしたちには炉心溶融が進行中かどうかまだわかりません」。核密閉容器が損傷を受けず、放射能漏出が防げたスリーマイル島の原発事故とは違い、福島の場合は、格納容器が実際に破壊されたら、もはや放射性物質の流出を遮蔽するものがないのである。

この時点では、「極端なシナリオ」という言葉が示すように、ま事態を見守ろうとする態度が認められますが、同時に後半では、「スリーマイル島の原発事故とは違い」とあるように、事態が深刻化するリスクの存在も指摘されています。フィリップ・ポンスたちの指摘の前提になっているのは、12 日の段階で、余震がおさまっていない、地震大国ニッポンという認識が働いているようです。それは、同記事が続けてつぎのような記述をしていることから読みとれます。

地球をつうじて記録されるマグニチュード 4 以上の地震のうちの 20%が起きている、日本のように地震活動が活発な国で、原発を安心な存在にすることなどできるのだろうか。金曜の大地震は、この列島における原子力のリスクについての議論を惹き起した。

しかし、翌日の 13 日付けの同紙になると、東京の特派員のジェローム・フノグリオが、首都の状況をレポートする記事を、「東京にはパニックのしるしなど微塵もない」というタイトルで書いています。

その休日には、東京都はパニックのしるしを微塵ほども見せていなかった。まるで都が、海外メディアの極端に悲観的な論調を打ち消したがっているかのようにだった、全世界に向かって少しばかり虚勢をはり、「怖がってさえない」ことを意味しようとするかのように。

記者はすでにこの時点で、日本人の冷静さを、一種の演技、演出ではないかということを書いています。それと対比されているのが、海外メディアの「極端に悲観的な」報道態度です。

この記事には、早くも東京を脱出する外国人たちのことが書かれています。ミカエル・フェリエというフランス人がインタビューを受けていますが、彼は NHK のフランス語会話にも出演していた、中央大学の教授です。祖母はインド人で、祖父はモーリシャスの人。アルザスに生まれ、子供時代をアフリカやインド洋で過ごし、サン・マロとパリで勉学。現在は10年滞在している東京で、作家活動をしなが、文学を教えている、とのこと。

「沖縄にむかって出発した友人がいます」とミカエル・フェリエ(作家・大学教授)は語る。彼自身は、京都行きの特急で、東京から離れる準備をしている。「日本人たち自身は、政府当局の告げを必ずしも信じていないにせよ、移動しろという企業からの正式な指示を待つでしょう」と彼は言う。

ここでフェリエさんがのべている、「日本人たち自身は、政府当局の告げを必ずしも信じていないにせよ、移動しろという企業からの正式な指示を待つでしょう」という一言は、かなりの数の日本人にあてはまるような気がします。すなわち、大多数の日本市民は、この時点で、「政府当局の告げること」を信じているようなふりをしていた、そして誰もが、自分のほかの人たちもそういうふりをしていることを知っていたのではないかと思うのです。

アンデルセンの寓話に、「皇帝の新しい着物」という童話があります。日本では、「裸の王様」というタイトルで知られているお話で、みなさんも筋はご存じでしょう。

皇帝が仕立屋につくらせた新しい着物は、世にも珍しい、目に見えない着物だということですが、ほんとうは着物はない。皇帝は裸です。そして、街の者は誰でもその事実を知っています。皇帝は何も身につけてはいない。しかし、それだけではありません。

街の者は、全員その事実を知っていて、しかも、「自分だけでなく、ほかの皆もその事実を知っている」ということを、これまた全員が知っている。皇帝が裸だという事実に関して、全員が既知なのだという、暗黙の了解としているわけです。

けれども、あの子供が出てきて、皇帝は裸だと口にしてしまう。たちまち人びとに動揺が起こる。子供が言ったことがらは、大人たちにとって決して未知の事実ではないにもかかわらず、です。

どうして、誰もがその既知の情報にうろたえ困惑してしまうのでしょうか？

それは、裸という事実を知らない「ふり」をすることが、もはやできなくなってしまったからです。事実

を知らない「かのように」ふるまうことができなくなってしまったからです。

これは、ジャック・ラカンの精神分析では、大文字の「他者」、つまり l'Autre が事実を知ってしまったということを意味します。

l'Autre というのは、たとえば、フランスならフランス語、日本なら日本語、という意味での国語の次元に対応するもので、個人言語ではなく、言語共同体であり、社会性であり、ラカンはこれを「ル・サンボリック」le symbolique, 象徴的なもの、象徴界と呼びました。

「皇帝は裸だ」と言いあらわすこと、言語化すること、言表として社会に送り出すことは、仕立屋によって皇帝が騙されていたという失態を、ラカンのいう象徴的な次元に登録することです。ラカン派の精神分析家、スラヴォイ・ジジェクによれば、共同体における暗黙の事実がそのように暴露された瞬間、そのような機能として大文字の「他者」が出現することになります。

「皇帝は裸だ」という言表は、誰もが知っているけれど、あの子供以外は誰も口にしなかった言表、です。アンデルセンの「裸の王様」の教訓とは、大人たちの愚かしさとか、子供の純粹さとか、いろいろ言われますが、精神分析的には、そのような言表のひきおこす象徴的機能の発露、ということにつきます。

これはむづかしいことではなくて、たとえば、私が今ここで、うっかり、滑ってころんだとしましょう。わたしは、こんな発表の席上でまずいな、と気まずい気持ちになる。皆さんだつて一瞬、なにか気まずい雰囲気になりますね。しかも、そのまま私が黙っていて、沈黙が続いたら、さらに気まずいことになる。

ころんでしまった私の立場からすると、なんとか失態をなかったことにしたいと思う。皆さんにも見て見ぬふりをしてほしいと思う。そこで、そのまま黙って立ちあがり、なにごともしなかったかのようなふりをして、また話し始めるというオプションも、確かにあるでしょう。

けれども、わたしが「すみません」と一言、口にすれば、どうでしょうか。私がかろうだという失態を、失態として認め、そして、たんに認めただけでなくて、それを皆さんに向かって言葉にする。これは、失態を他人たちに伝える、社会性の次元で、大文字の「他者」に伝えるということです。

このような象徴的機能を果たす言葉であれば、じつはそれは単に、「やっちゃった！」とか、「おお！」でもいいんですね。それに、このような機能を果たすのであれば、この「やっちゃった！」とか、「おお！」と発話するのは、私でなくて、皆さんのうちの誰でもいい。

さきほど、この機能は個人のレベルではなく、共同体や社会のレベルに属することだといいました。これは、この機能が、失態をおかした私個人にかぎられるのではなく、この場にいる誰でも果たし得る機能なのだということです。それは、「だいじょうぶ?」「いたくない?」という同情や慰めでなくてもいい。笑い声でもいいわけです。「ははは」というだけでも、そこに大文字の「他者」が出現する。

今回の震災で起きた、そして起き続けている大小さまざまな失態をめぐっても、原理的には、いまお話ししたような精神分析が可能になると思います。とくに原発事故を過小評価しようとしている政府、保安院、東電の人びとです。

彼らに言わせれば、自分たちは然るべき根拠に基づいて、そうした主張を行っているのだと言うでしょう。そして、自らは冷静に、論理的に、「原発推進」を唱えていると言うでしょう。「経済発展」や「科学」といった大義をもって自認しているわけです。

でも、彼らにそうしたもろもろの主張を唱えさせる精神分析的根拠、無意識的なメカニズムはといえば、それはいったい何でしょうか。

もし彼ら大人たちが、アンデルセンの子供から、「皇帝は裸だ」と言われたら、やはりおなじようにうろたえ、困惑の感情を抱くと思います。しかし、なぜ自分のうちに、そのような感情が抑えきれずに湧いてくるのか、ということにはついては、彼らは説明できないでしょう。

「原発推進」派たちも、核燃料という存在が、じつは今回のような天災のまえでは、なにも身にまっとうしていないにひとしいこと、絶対壊れたり漏れたりしない格納容器など無いのだということ、つまり、「王さまは裸だ」ということを知っているのです。

しかし、そのような人びとは、誰かが沈黙を破って「王さまは裸だ」と言い出すことを好まない。もしくは、きっと人一倍不快に感ずるようなタイプの人びとなのです。自分は知っていながらそれを公にしなかったことが、そのような人びとをして、逆に一層強く不快にするのです。

たとえば、フランス人の精神科医、クリスチャン・ナヴァールが 16 日付の『ル・モンド』でインタビューに応じています。そこで指摘されているのは、地震や津波はたしかにトラウマ的な出来事だが、めずらしいことではない、過去の災害にもある、いわばありふれたケースだ、ということです。

地震と津波のショックは、どちらかと言えば、よく吸収されてきています。日本人は以前からそれに備えていましたし、自己防御の反射と、強い連帯とに支えられていました。トラウマとなる喪があるということは、まったく明白ですが、それはよく知られていることでした(mais il s'agissait de choses connues)。

これにたいして、放射線のほうは、つぎの指摘のように、目に見えない、それじたい映像化できない事象です。「原子力事故の脅威は、管理するのがもっと困難です。なぜなら、もちろんそれはこの国の歴史の痛ましいエピソードを思い起こさせるからですが、また同様に、それが人間には制御不可能、検証不可能な、目に見えない敵の亡霊(*le spectre d'un ennemi invisible*)を表象しているからです」。

こうした認識にたいしては、「いや、地震や津波もれっきとした災害で、当事者にとっては生死の問題だ」という反論がかならず起こるでしょうし、「まだ被曝による死者はいないじゃないか」という抗弁もなされるにちがひありません。けれども、確率的な次元の晩発性の「死」だからといって、それを手をこまねいて放置することとはまた別問題でしょう。

また、このあいだの夏に、「死の町」といった発言をしたせいで、辞任した大臣がいました。そのいっぽうで、ル・モンドの特派員が、先月の東日本駅伝をめぐるのは、「死の駅伝」*L'ekiden de la mort...*というタイトルのブログ記事を書いています。

いいかえれば、災害の認識において、災害が一個人の認識を超える時間的・空間的現象だという前提を忘れると、個人個人の持っている情報や表象が矛盾して見えるため、そこで共同作業が停止してしまいます。

とりわけこの震災をめぐるのは、日本国内と海外のあいだでは共同作業が成り立ちにくいかもしれません。第一に、震災関連の情報量が違いますし、第二に、そうした比較的少ない情報に、さらに各社会の文化的・歴史的フィルターがかってくるからです。

では、今回のような外国語教育研究発表会のテーマは、災害認識の探究にとって、まったく意味のない試みなのでしょうか。国内のわたしたち自身ですら充分把握できない事態にたいして、さらに輪をかけて情報量の少ない遠方の地域から、その地域に固有のフィルターをとおして眺められた震災のイメージは、わたしたちに何らかの意味のあることを語っているのでしょうか。

すくなくとも、見る人によって、情報やイメージに差異があるのはあたりまえで、ときには対立や矛盾があっても当然だという先ほどの前提に立つならば、わたしは、たとえ直接の被災地ではない海外からのディスカールにも、何らかの意味を読み取ることはできると思います。

たとえば、国内には無数の情報、イメージが氾濫していますから、日本語環境にいる私たちが、目の前のマイクロレベルに拘泥し、混乱しているかもしれないという疑いはつねにつきまといまいます。しかし反対に、地理的にも文化的にも距離をおいている外国人が、マクロな視野から事態のポイントをつ

かんでいる可能性もないわけではありません。

さらに、国内の私たちが、ある事態を認識し、熟知していながらも、あえてそれを口に出さない、公にしないというケースもあるはずです。しかし、外国人はそれをすらすらと言ってしまふ。特に、後半で見たような一連の放射能事故については、そうしたケースが多かったのではないのでしょうか。

たとえば、これはアメリカのケースですが、オバマ大統領は、3月17日付で、福島第一原発から80キロ圏外への退避勧告を決定しました。米国チャーター機で約100人を台湾へ退避させ、外交官らの家族約600人に退避許可。さらに米軍人の家族2万人の国外退去を支援しました。

アメリカでは、NRC(米国原子力規制委員会)が事故の現状を把握し、米国内で規定された指針に基づき防護措置勧告を行います。そして今回の福島の場合は、3月14日に3号機が爆発したことを受けて、検出された数値を計算した結果に基づき、17日には「50マイル(80キロ)圏外への退避」を命じたということになります。これは、NRCのヤツコ委員長が、これまでに爆発を起こしていた1号機および3号機の問題だけでなく、4号機も使用済み核燃料プールの水の大部分が無くなっているとの見解を示し、事態悪化を懸念したためです。

しかし、日本では3月18日の時点で、30キロの指示しか出していないませんでした。18日に枝野官房長官は記者会見で、記者からの質問にたいし、つぎのような答弁をしています。

記者—本日、オバマ米大統領は在日米国人に対して、福島第一原発の80キロ圏外に出るよう指示を出しました。80キロは世界中の政府が最低限の基準としているものです。ということはオバマ大統領や他国の首脳が言っていることが間違いなのでしょう。それとも日本だけが違うのですか？

枝野 「それは、わが国のまさにきちっと責任ある立場として、実際に得られているデータ、情報、専門家の分析に基づいて、日本政府としては国民の皆さんに対して、適切な判断として今の指示をさせていただいております。しかしながら、他国のそれぞれの政府が外国による自国民保護の観点からさまざまな判断に基づいて、これと異なることをなされることは逆の場合、私は当然あると思っておりますので、あり得ることだと思っております」

<http://uesugitakashi.com/?p=621>

この官房長官の発言に関しては、すでにいろいろ議論がなされているので、ここではくりかえしませんが、これが将来、あたらしい21世紀版の寓話にならないことを願うばかりです。

[専修大学教授 下澤和義]